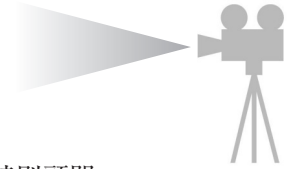




映画とその時代 ⑤



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

2006年のドイツ映画『善き人のためのソナタ』は、胸の奥に沁み入るような人間ドラマだった。冷戦時代の東ドイツを舞台に、ひそかに国民を監視する国家保安官が主人公。その陰湿な職務から生まれた哀切なラヴストーリーだが、おそらくこの映画の真の主役は、いまや歴史から消え去った東ドイツという国家そのものといえるだろう。

東西分裂の時代、この国は社会主義国家群の優等生とされていた。しかし1990年の統一後、鉄のカーテンで隠されていたその実態が次第に明らかになってゆく。そして初めてこの映画が、シュタージと呼ばれた秘密の国民監視機関の存在をひろく世に知らせた。

反体制分子を摘発するために国民のプライバシーを徹底的に洗い上げる。尾行、盗聴、脅迫、そして密告の強要。一般の国民はその存在を知らぬまま、突然の連行に脅え、親子や兄弟の間でさえ疑心暗鬼と相互不信に陥る。その異様なまでの密告社会、そしてそんな社会だからこそ生まれ得た人間性の発露。西ドイツ育ちのまだ若い監督が、4年の歳月を費してこの重いテーマを描き切った。

この監督の意欲をかり立てたものは、不本意に引き裂かれてしまった同じ民族への熱い想いであり、その悲劇的な苦難を歴史の闇から救い出すこ

とだったろう。そしてそこにこそ映画というメディアの本領があると確信したに違いない。

忘れがたい思い出がある。1989年、ベルリンの壁が崩壊する2ヶ月前、初めて東ドイツに数日間の旅をした。戦中の旧制高校時代、ゲーテやベートーベン、『会議は踊る』『未完成交響楽』などの映画でドイツ文化に浸っていたが、既に当時の西ドイツはアメリカ消費文化に占領されてその面影を失っていただけに、体制の違う東ドイツに残り香を期待する気分があった。西との経済格差の大きさや旧態依然のインフラはほぼ想像通りだったが、何よりも巷を流れる空気が、西とは全く別の国だった。喧騒も色彩の氾濫もなく、時がゆっくり流れてゆく。人びとは一様に物静かで、何やら思索的に見え、さりげない処に思いがけなくパッパやシラーの香りが漂う。ドイツ文化はたしかにこの国が継承している。その時の私は浅薄にもそんな感慨を覚え、街の表情の裏に潜むシュタージの存在など全く思いも及ばなかった。この映画の場面と全く同じ時代、同じ空気のなかに居合わせたことになるが、今にして思えば、ホテルやレストランなどで数多くの人びとと言葉を交わしたひととひととにシュタージの眼が光っていたのだろうか。———